英国型階級社会と日本型ネオ階級社会

林　信吾氏

○**林**　おはようございます。ご紹介にあずかりました林です。

今、先生の方から紹介していただきましたように、私は、ここ板橋の出身です。

出身校がすぐそこにある志村高校。住んでいるところは、東武東上線の大山という駅の近くです。だから、朝早くからといってもそんなに大変な思いはしないできょうは来たわけですけれども、ここのあたりに来るのは本当に久しぶりで、大東文化大学周辺というのは、昔いろいろありました。

今、大東文化大学の学生さんたちがずっといるわけですけれども、第一高校の出身者はいますか？……いませんか。では、安心して悪口を言います。

あそこの生徒は昔、本当に柄が悪くてね。ちょいちょい西台、蓮根の駅で我々都立高校の生徒とよくもめ事を起こしていました。

格差とどういう関わりがあるのかと思われるかも知れませんが、まあ、お聞き下さい。

我々は都立高校で共学でした。したがって制服を着る必要がない、男女共学、女子と一緒に帰れる。大東文化大学附属第一高校、制服でしかも柄が悪い。何が起きるか大体想像がつくと思うけれども、結局、女の子と歩いていると絡まれたり、あるいは女の子同士のグループにちょっかいを出されたりということがたまに起きる。

そうすると、東武東上線で通っている人間が迷惑するわけです。何しろこっちは大半の第一高生が西台、蓮根の駅を利用していますから人数が多い。ちょっと何かもめ事があると、人数的に劣勢だということで、東上線の側から駆り出されるわけですね。

何が格差かというと、東武東上線の方にある私立の学校というのは、慶應志木、城北高校、立教の附属、お坊ちゃん学校、秀才校、受験校と言われている学校ばかりだから、いたって平和でした。なのに、この都営三田

線の方に来ると、某大学の附属高校をはじめ、ちょっと柄の悪い学校が多くてもめ事が多いと。

三田線の方でもめそうだということで、助っ人に駆り出される。通学定期を持っているのに、なんで遠回りをして電車賃を使って、なおかつ危ない目に遭って帰らなければいかんのか、とよく思いました。私の青春の思い出です。

こういう、学校に対する評価とか格差というものが、今の日本で最近よく取り上げられる格差社会の話に結びついているわけですね。

あまり他校のことばかり言ってはいけないのですが、当時の東京都立高校の普通科というのは学校群制度というのがありまして、私が卒業した志村高校を含めて、そういう意味では学歴社会の中で余り高い評価は受けていませんでした。決して某大学の附属高校を悪く言う意図ではありませんので、ご了承下さい。

今の日本の格差というものが何によってもたらされてきたかというと、学歴社会、受験戦争という言葉がありましたけれども、これとやはり重なって見えてくるわけです。

きょう、私はここに1冊文庫本を持ってきました。読んだことがある人はいますか。福澤諭吉の『学問のすすめ』。これは有名な本です。タイトルぐらいは皆さんご存知だと思います。で、冒頭の部分、ちょっと読み上げます。

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと言えり」

これは有名な書き出しです。

「されば、天より人を生ずるには、万人は万人皆同じくらいにして、生まれながら貴賤上下の差別なく云々」と書かれております。途中省略します。「人学ばざれば地位なし、地位なき者は愚人なりとあり、されば賢人と愚人との間は学ぶと学ばざるとによって出ずくるものなり。また、世の中に難しき仕事もあり易き仕事もあり。その難しき仕事をする者を身分重き人と名づけ、易き仕事をする者を身分軽き人という」。

ちょっと言い回しは難しいですが、言っていることは非常に簡単です。

勉強した人が偉くなれるんだよということを言っているにすぎません。では、その「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」というこの有名な一説はどういう意味か。生まれつき身分の上下があるわけではない、と、端的に述べているわけです。

この『学問のすすめ』というものが書かれた背景は何かというと、明治維新です。これはもちろん皆さんは常識としてご存知だと思いますが、それ以前、封建時代、江戸時代、どう呼ぼうといいのですが、士農工商と呼ばれる身分制度が確立しておりました。武士の身分の子に生まれたら武士です。殿様の子に生まれたら、本人の能力と関係なく殿様なわけです。身分の低い家に生まれたら、どんなに頭がよかろうが努力しようが、低い身分のままです。もちろん例外はありますけれどもね。

そのような社会は明確に否定した。しかし、一方、人間にはやはりそれぞれ差があるのは当たり前だということも、同時にまた福澤諭吉は言っております。それは何か。学問を修めて社会的に重要な仕事につく人、そうではない人。このようにはっきりと格差を肯定しております。日本の近代化というのは、実はここから始まっているんですね。士農工商という身分制度は否定しましたが、同時に、やはり社会的競争に学問という概念を持ち込んで、学歴社会というものが次第に形成されてきた。これが今に通じてきているわけです。これもよく知られるように、福澤諭吉は慶應義塾の創立者であり、現代の学歴社会においても慶応大学というのは学歴ブランドになっております。

ですから、よく言われるように、日本は横並びの社会だと、階級とか階層、格差が少ない、そういうふうに言われてきた。だからこそ、最近、格差の問題というのがよくマスコミで取り上げられ、いろいろなことを論じる人がいるわけですが、果たして本当に日本は格差の少ない社会であったかということです。

これは、少し歴史をさかのぼりますと、こういう身分の格差という意識はどんどん薄れていきました。もちろん差別はありましたし、いろいろ問題はありましたけれども。特に、家柄がどうの、親の職業がどうのという

ことでその人を評価される度合いは、これはやはりヨーロッパ諸国などに比べればはるかに小さかった。要は本人次第だという意識がある程度徹底していたことは、事実だと思います。

しかしながら、戦前においても、「いい家」といいますか、要するに経済的に余裕のある、お金がある家の子どもしか高いレベルの教育を受けられなかったということは、かなり徹底しておりました。それが、戦後、民主化ということを言われましたけれども、これがどこまで改善されたかというと、実は戦前と余り変わってなかった。

ひとつの統計がありますけれども、東京大学の学生の中で、社会的に上層とみなされる職業または年収を得ている親の比率というのは、戦前と戦後でほとんど変わっておりません。だから、受験戦争ということが言われながらも、やはり経済的な余裕があり、なおかつ教育に熱心な家庭の子供が高い学歴を得るという傾向は変わっていないわけです。

これから、本日のテーマはイギリスの階級社会ということなのですが、これは日本人にはなかなかわかりにくい。イギリスでは現在も貴族制度というものが残っていますが、貴族はちょっと置いておいて、一体アッパークラス、上流と呼ばれる人とワーキングクラス、労働者階級と位置づけられる人たち。この違いは何によってもたらされるのか。

実を言えば、一つは学歴なんですね。大体においてイギリスでは、高校進学率が今でも半分程度ですから。大学進学率になると２割もありません。そもそもイギリス全土で学位を授与できる大学というのは、全部で96校しかないんです。日本はどれぐらいかというと、国公立と私学を合わせて551校ほど全国であるそうです。ですから、単純に考えて５分の１以下。

イギリスの人口は日本の大体半分ちょっとですが、それを割り引いて考えても、いかにイギリスにおいては大学生というものがエリートとみなされているか。これは容易にわかることだと思います。

しかし、では学歴だけでアッパー、ローワー（ワーキングクラス）、社会的な階級の上と下が決まるのかというと、これはなかなかそうではない。なぜならば、イギリスで有名な大学と言いますとオックスフォード、ケン

ブリッジ。これは皆さんも名前ぐらいは聞いたことがあると思いますけれども、どちらも学費の高い私立の大学です。

アメリカも実はそうなのです。アイビー・リーグと言われるハーバードとか、全部私立なのです。したがって、学費が非常に高い。ということはどういうことかというと、基本的には経済的に恵まれた家庭の子供でないと大学で学ぶことができないということがあります。

しかも、なおかつイギリスの場合、オックスフォード、ケンブリッジに合格するようなのは、もちろん秀才に違いないのですが、実は今でも過半数が小学校から私立で教育を受けております。単なる受験秀才でなく、あらかじめエリートになるべく定められた「育ちのよい秀才」が集まる。こういう現実が１つあるわけなのですね。

これは、どういうことかというと、やはり国のあり方としてみんなが義務教育、公教育というものにあまり投資をしてこなかった。

簡単に言ってしまえば、エリートの子供がエリートになればよいのであり、労働者の子供は労働者になればいいという考え方が、ずっと根づいてきた。だからこういうシステムがいまだに温存されている。

これが、逆に労働者階級とされる人たちの意識に何をもたらしたかというと、ここでちょっと皆さんに考えてみてもらいたい。勉強すれば偉くなりますよ、だからもっと勉強しなさいと言われるのと、おまえらどうせ偉くなれないから、勉強しなくていいよと言われるのと、これから将来のある学生としてはどちらの世の中に希望が持てるだろうか。

こういう問題がひとつあって、イギリスでよく言うのは、地下鉄などはまず時間通り動かない。バスもそうですね。それから、公衆電話などは故障ばかり。家の電話の故障は余りなかったけれども、間違った請求書が送りつけられてくるなどというのは日常茶飯事。銀行までストライキをやる。そういう国でもあったわけです。

なぜそのようなことになるかというと、やはりこれは一度労働者として義務教育だけ終えて社会人のスタートを切ってしまうと、もうそこから上がれない。上がれないどころか、自分の子供も労働者になる。だから、無

理して子供を上の学校にやらせなくてもいいと。サッカーにでも熱中して、パブ—居酒屋です—でおいしいビールが飲めればそれでハッピーだという、こういう生き方になってしまう。

誤解されては困るのですが、私はイギリスの労働者の悪口を言いたいわけではありません。ただ、福澤諭吉が否定した、

「人間には持って生まれた身分のようなものがある」

という考え方が浸透してくると、エリートではないと決めつけられた人たちのモラルはどうしても崩れていく。こういうことを私は指摘したいわけです。

ですから、イギリスは今でも強固な階級社会なのです。これについて、私はよく指摘しました。一時イギリスブームという本が売れて、イギリスはおいしいとか、そういう本がたくさん売れました。中には読んだことがある方もいるのではないかと思いますけれども。イギリスはすばらしいとか、日本はそれに比べてちょっとどうだとかという、そういう本に対して、私はずっと批判を加えたわけです。イギリスの一体どこを見てきたのかと。ごく一部の教養にも財産にも恵まれたイギリス人とだけつき合って、それでイギリス人というのは何てすばらしい人たちなんだと言ったら大間違いだということを、ずっと書いてきました。

しかし、そこから、これから日本の格差についての話をするわけですが、どうも最近、やはりおかしなことになってきているなと思わざるを得ない。ここで今聞いている人たちは皆学生さんですから、社会人として世に出て働いて給料をもらうのはこれからですね。くれぐれも引きこもったりしないようにしてもらいたいものですが。

だから、まだ、この問題には直面してないけれども、今までの日本はある程度、学歴の壁というものはあったけれども、より多く努力した者がより高い収入を得られるということが、ある程度信じられる社会ではあったと私は考えています。が、それがだんだんおかしな方向にねじ曲がってきた。

就職に苦労しないレベルの大学に行きたいと思ったら、小中学校から私

立で教育を受けなければいけないというふうにだんだん言われてくる。これは世論調査などでも、今、国民の75％が親の経済力と子供の学力は関係があると考えているそうです。４人に３人です。

ここでちょっと聞いてみたいけれども、どう思いますか。大東文化大学の学生さんたちにちょっと質問します。自分はこれからエリートになれるだろうと思っている人は、ちょっと手を挙げてみてください。いませんか。

では、逆です。うちの親はエリートだと思っている人、手を挙げてみてください。これもいない。

では、３番目の質問をします。エリートの子供はエリートになるのが自然だと思っている人、いたら手を挙げてみてください。何人か手が挙がりましたね。

では、ちょっと質問を変えましょう。頭がいい親からは頭のいい子供が生まれるだろうと思っている人、ちょっと手を挙げてみてください。これも何人かはいますね。でも、少数派ですね。どうなんでしょう。本音は違うという人も少しいるのかな。

今日、たまたま国会で教育基本法の改正ということが審議されるそうですが、私は、これから将来に向けての日本の教育に対して、非常に危機感を持っているのは、愛国心を教えるとかそういうことでは実はなくて、優秀な親からは優秀な子供が生まれ育つに決まっていると。その逆もまたしかりと。そういう考え方が教育に持ち込まれつつあるのではないかということを、非常に心配しています。

このことでは、色々な人と論争になるのですけれども、昔から確かに経済的にゆとりがあって教育熱心な、つまり優秀な家の子ほど優秀と呼ばれる大学に進む傾向というのは確かにあったと思います、現実を見れば。しかし、建前としてはそうではなかった。

この「建前としては」というのが、実は非常に大事なところなのですね。親がどういう職業についていようと、また親の学歴がどうであろうと、一流と言われる大学に合格し、優秀な成績で卒業すれば、エリートコースと呼ばれる出世の道が開かれているという建前だったんです。これは、実は

非常に大事なことなのです。

それが、ある意味では勉強しろ、勉強しろという受験戦争、受験地獄というふうに言われました。実際に、私は受験勉強でそんなに苦労した口ではないんですけれども、私が高校生だったころ、およそ30年前です。何と言われていたか。四当五落ということが言われました。どういう意味だか。言っては悪いけれども、ゆとり教育で育ってきた今の大学生には理解しにくいんではないでしょうか。一流と呼ばれる大学に入るためには、睡眠4時間が限度だと。5時間寝ているようなやつは落ちると。こういうことが本当に言われていたんですよ、受験戦争と言われていた時代には。

こういう学歴社会というものがいいというふうにはとても言えないと思います。私の身近なところではなかったけれども、中学生のころよく新聞で、受験ノイローゼで自殺してしまった中学生がいたりして、それを新聞で読んで、同じ中学生として憤慨したりしたものです。

ところが、その後私はイギリスに行って、先ほど先生に紹介されたとおり、10年間住んで、イギリスの階級社会というものをよく見てきました。見てきて何を思ったかというと、こういう生まれながらにしてエリートの子供はエリート、労働者の子供は労働者というふうに、あらかじめ決めつけられているような社会に比べたら、受験戦争、偏差値社会、どういうふうに呼ばれようとも日本の学歴社会の方がまだ平等だったんじゃないだろうかと、こう考えるようになったわけです。

だから、こういうことを言うと、それはノスタルジアじゃないかとか、いろいろなことを言われたりもしたけれども、1つの私の信念としては、この福澤諭吉が『学問のすすめ』で書いたような考え方が、全面的に正しいとは言えないだろうけれども、これが書かれた時代のことを考えたら、やはり正しい意見ではあると。

人間には、何だかんだ言っても能力に差があります。これははっきりしています。それから、もっとはっきり言ってしまいますと、いろいろなことで得をしたり損をしたり。今、男女ともにそうですけれども、外見、『人は見かけが9割』なんていう本も出ていますけれども、外見で得をし

たり損をしたりということも、君たちはまだ若いから、いろいろな場面で感じることもあるのではないでしょうか。こういうこともあるんですよ。これが一方では現実なのです。

これをわかりやすい例で言うと、人の外見はそれぞれ違うということと、見た目で人を差別していいかどうか、これは全然別の問題ですよね。これも常識としてわかってもらえると思う。

それと同じように、人間の能力にはそれぞれ差があるということと、その結果生まれる格差がどこまで認められるかは、別問題なのです。さらに言えば、本人の努力、業績、そういうものによって生まれる格差なのか、あらかじめ格差を背負わされてしまっているのか。ここはよく注意して皆さんに考えてもらいたい。

格差があったっていいじゃないかという議論をする人というのは、よくこういうことを言う。

人の世にはもともと格差があって当たり前なのに、今までの日本の教育で格差がいけないというふうに無理に教えてきたから、逆に世の中はおかしくなった、と。

よく引き合いに出されるのが、運動会で、手をつないでみんなで一緒にゴールインしましょうと。そういうばかなことをやっていたから、かえって世の中の価値観がおかしくなったと。競争社会でいいじゃないかと。

確かに、運動会で手をつないでみんなで一緒にゴールしましょうというのは、ばかばかしい。ばかばかしいけれども、それはたかが運動会の話でしょう。そんなこと言ったら運動会なんていうイベント自体がある意味ばかばかしいじゃないですか、そう思いませんか。

今、問題にされているのはそうじゃない。人生という競争において、あらかじめスタートラインに差をつけておいて、それで、競争をさせて勝ち組だ負け組だと。これはひどすぎる。

これが、私の言っているネオ階級社会の原点なんです。

私は、階級社会ではなくて、ネオ階級社会というふうに言っていました。なぜならば、これからそういう階級社会が訪れるというふうに警告してい

るからです。かつては、階級社会といえばさっきも言った士農工商、これがまずありました。そして明治からいっても、戦前はやはり身分が違うとか家柄がどうだ、こういうことを言われておりました。これもう人は持って生まれた分というものがあるという考え方そのものです。

戦後、日本国憲法においてそのような身分制度といったものは一切否定されております。しかし、どうだろうか。一方では、さっき言った四当五落、受験競争というようなことを評して、出身大学のランクによってもうあらかじめ人生の勝ち負けが決まっているかのような格差というものが生まれてきた。

そろそろ時間がなくなってきましたが、ちょっと数字を挙げて説明します。日本では、ヨーロッパ・アメリカに比べて格差が少ないと言われてきたその証拠として、大卒と高卒の賃金格差が、アメリカでは1.51倍、イギリスでは1.65倍と言われておりますが、日本ではせいぜい1.26倍です。

ただ、この数字には多少からくりがありまして、日本の企業会社というのは、終身雇用制で年功序列賃金ですから、高学歴のエリートでも若いときは割と給料は安いんです。だから、こういう数字になるというだけで、40歳になって子供２人ぐらいいる世帯の所得の格差を比べたら、高卒と大卒では、これはもちろん会社によっていろいろ違うわけですけれども、大まかに言って月収にして10万円ぐらい違うと言われています。

月収10万円だと、ボーナスを含めた年収だと200万円くらい違うわけですね。40歳でそのぐらい差がついているということは、それから差が開かないとしても60歳まで働き続けると、2,000万円くらい違ってしまう。生涯賃金で計算したら、実は随分差がつくのです。

ただ、ここでも注意しなければいけないのは、だったら無理しても大学を出ておいた方が得だよねと、そう言い得るでしょう。

イギリスはそうではないんです。労働者の子供は労働者になればいいという、逆に労働者階級の文化みたいなものが徹底していますから。だから、小学校レベルでも勉強しない方がクール（かっこいい）だとか、公立の小学校などは大体午前中で授業をやめてしまいますから。お昼時になると小

学生がたばこを吸いながらヨタって歩いている。これは、私、本当に見ましたよ。

日本では、本当に柄が悪いといっても程度問題で、最初に話した某大学の附属高校などは、制服着てタバコを吸っていたのを見かけたりしましたけれども、せいぜいそのレベルです。もちろん、少年犯罪とかそういう問題はずっとあるわけですけれども。

しかし、いいですか、学校がどこだからということでゴタゴタは起きても、あいつはそういう階級の人間だからというような決めつけ方はしませんでした。出身校によってそういうふうに言われたこともありません。君たちも、これから卒業して社会に出るけれども、多分まだないでしょう。「おまえ、どういう階級の人間？」というふうに言われることは恐らくない。しかし、イギリスでは、自分はどういう階級の人間か、どういう階級の出身だということをまずもって自分のアイデンティティの一部にする、せざるを得ない。

それから、さっき大学の話をしましたが、大学に進むまでの前段階としてパブリックスクールというものがある。皆さんもハリー・ポッターを見たことがありますよね。あの魔法学校、あの学校の校舎の風景とか学生食堂のたたずまいとかいうのは、スコットランドの有名なパブリックスクールをモデルにしています。

だから、パブリックスクールと急に言われてもピンと来ないと思うので簡単に説明しますと、もともとは貴族とか大金持ちの子供というのは、家に家庭教師を呼んで勉強していたわけです。でも、それではやはり社会的な、パブリックな視野が狭くなるからということで、上流階級の子弟を預かって勉強させる、全寮制の学校を作りました。

その後、出身階級にはこだわらず、秀才を全国から集めるという建前にはなりましたけれども、さっきも言いましたように、学費が高いという問題もあって、やはり余裕のある家の子供しか入れない。そして、名門パブリックスクールの出身者が一流と呼ばれる大学の中で多数派を占めていますから、どうしても人脈、学閥、そういう面で階層が固定化されていって

しまう。なかなかここから、下から成り上がっていくというのは大変なのです。

ここで、また、ちょっと皆さんに質問したいのですが、ライブドアの堀江被告の事件はご存知だと思いますが、法律的にどうであるかは別として、ホリエモンは悪いやつだと思っている人、ちょっと手を挙げてみてください。法律的にどうかということは別にして、ホリエモンのやったことはすべて悪かったと思っている人は手を挙げてみてください。

意外にいないですよね。自分も警察に捕まらないんであればホリエモンみたいになりたいと思っている人、手を挙げてみてください。警察に捕まらないんであればね。そうですよね、これは結構いるはずです。

これは、今までの日本社会の考え方では美徳です。なぜか。向上心があるからです。偉くなりたい、お金持ちになりたい。今、ホリエモンの話が出ましたけれども、もう１人、村上ファンドの村上被告、いますね。あれが、テレビの記者会見で、「金もうけして悪いですか」と言いましたよね。あれも、私が不思議に思ったのは、もうけるのが悪いんじゃなくて、もうけ方が悪いんだと何でだれも言わないかなと思いました。

松下幸之助が巨額のもうけを出したからといってだれも文句を言わないのですよ。なぜか。あの人は、ちゃんとナショナル・パナソニックという世界に名の通る企業をつくり、そこで多くの人を雇って、たくさん電気製品、いい物を生み出していった。しかも、そのもうけたお金をちゃんと社会に還元しています。有名な松下政経塾。それから、サッカーに関心のある人は当然ご存知だと思いますが、Ｊリーグのガンバ大阪、今優勝争いをしていますけれども。私はジュビロファンなのでちょっとおもしろくないですけれども、あれもすべては松下幸之助の経営哲学から生まれてきているものです。

企業は利益を出さなければいけないが、出した利益は社会に還元しなければいけない。

こういう考え方であれば、幾らもうけようがだれも文句を言わないのです。しかし、ホリエモンにせよ何にせよ、なぜ今世間から言われているか。

単に金もうけのための金もうけを追及したからなのです。

話は戻りますが、学歴社会と並んで今までの日本では、金をたくさんもうけた人間が偉いというようなことが言われてきた。イギリスの階級社会の中では、これはある程度否定された考え方です。なぜならば、身分が高い人は余りお金のことを言ってはいけないという、ジェントルマンシップの考え方があるから。

で、これを美しい考え方だと思う人が多い。私に言わせれば、はっきり勘違いなんですが、こういうのが国家の品格だと考えているような人が、某大学教授の中にも見受けられます。ここで言うのも何ですが、大学教授って大体世間知らずが多いですから、あまり鵜呑みにしない方がいいと思います。

大体、最後のまとめとしてはっきり言っておきますが、階級社会とは、すなわち身分社会である。私が心配するネオ階級社会というのも、優秀な親からは優秀な子供が育つという考え方が教育システムに持ち込まれて、どうせ偉くなる見込みのない人間は勉強しなくてもいい、大学なんか行かなくてもいいという世の中になり、そこからエリートへの道があらかじめ開かれている層と、どんなことをしても労働者階級からはい上がれない層とに分かれていく。世代を超えてもう決まってしまう。さっきも言いましたが、人生のスタートラインであらかじめ差をつけられるような社会になる。格差社会の、本当の怖さはここにあります。

皆さん、これから勉強して社会に出ていくわけですが、学歴社会の怖さ以上に、これから恐らく就職などの問題でいろいろ学歴の問題が皆さんの一生にかかわってきます。それは仕方がない。しかし、くれぐれも学歴社会の怖さと階級社会の怖さというのは全く質が違うものだと。能力による格差、努力の結果としての格差は認めていいけれども、あらかじめ人間の生まれや育ちで身につくような格差というのは認めてはいけない。このことをもう一度考え直してください。

これで、本日の私の報告は終わります。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

○司会（永井） どうもありがとうございました。

時間が40分ということで限られておりました。もっとお話し長く聞きたいとは思うのですけれども。午前中、もうお一方、渡部哲郎先生、スペインあるいはバスクについてお話しをいただきます。

バスクというのは、皆さん、ご存知でしょうか。ちょうどフランスとスペインの国境あたりにピレネー山脈というのがありますが、そのあたりです。日本人にとって余りなじみがないかもしれませんけれども、恐らく皆さんの中にご存知なのは、フランシスコ・ザビエルという、日本に最初に、16世紀にイエズス会の宣教師がやってきます。このザビエルがバスクの人だったということではよく知られております。

もう一つは、司馬遼太郎の『街道を行く』というシリーズがありまして、皆さんの年代だと余りご存知ないかもしれませんけれども、ＮＨＫテレビでずっとやっておりまして、彼がヨーロッパで取り上げたのが、イギリスでもフランスでもドイツでもなくて、オランダとアイルランドと、それからバスクなのです。今でもバスクについてビデオがあって見ることができますので、関心のある方はぜひごらんになったらいいかと思います。

それでは、渡部先生、お願いいたします。

英国型階級社会と日本型ネオ階級社会

林信吾

（1）用語の定義付けが大事である

→「格差」「階級」「身分」「社会的地位」はそれぞれ異なる概念。

格差が拡大したからと言って、ただちに階級社会になるわけではない。

（2）近代社会とは「身分」の否定から始まった。

福沢諭吉の『学問のすすめ』

「天は人の上に人を造らず　人の下に人を造らずと言えり」という有名な書き出し。

ただし、続きがある。

「されども今広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり（中略）賢人と愚人の区別は学ぶと学ばざるとに由って出来るものなり」

慶應義塾の創立者・福沢は、学歴ブランド主義の元祖だとも言える。

（3）階級の基礎にあるのは職業

もともとは「戦う者＝貴族」「祈る者＝僧侶」「働く者＝平民」という区別。

やがて、都市商工業者（ブルジョア）が台頭し、中産階級が生まれた。

頭脳労働の、肉体労働に対する優位性は、福沢も説いている。

英国では、今もクラース（階級）によってライフスタイルが異なる。居酒屋でさえ、入口が２ヶ所あり、店内も仕切られている→中産階級用と労働者階級用。

階級が異なると、話し方まで異なる。

（4）最大の問題は教育格差

今の日本では、およそ75％の人は、親の経済力と子供の学力は「関係がある」と考えている。

英国では、今でもオックスフォード、ケンブリッジなど名門大学の学生の過半数は、小学校から私立で教育を受けている。
これは、格差を固定化し再生産するシステムに他ならない。

（5）格差が固定化されるネオ階級社会

教育環境の格差をまず是正しなければ、経済的に恵まれない家庭に生まれた子供は、高等教育を受けることができなくなり、社会的な競争からあらかじめ排除されてしまう。
この結果、低い賃金での単純労働しか職がない、ということになり、結婚しても子供の教育に投資などできなくなる。
このようにして、日本に新たな階級社会が根付いて行くことになる。